

姜夔全集

第十六卷

荷風全集

第十六卷

岩波書店

昭和三十九年一月十三日 第一刷發行

昭和四十七年五月六日 第二刷發行

荷風全集第十六卷

定價八百五十圓

著者 永井 壯吉

發行者 岩波 雄二郎



發行所

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩波書店

目 次

荷風文藁	一
礫川徜徉記	三
几邊の記	一五
白鳥正宗氏に答るの書	二三
文藝春秋記者に與るの書	二九
金阜山人戲文集	三五
金阜山人戲文集叙	三七
藝人讀本	三九
東京花譜	四九
賞心樂事	五五
洋服論	五七
洋食論	六七

桑中喜語		七
猥褻獨問答		一〇三
每月見聞錄		一〇七
東京年中行事		一四五
荷風隨筆		一五七
成嶋柳北の日誌		一五九
柳橋新誌につきて		一七五
向嶋		一八五
百花園		三〇一
上野		三〇七
帝國劇場のオペラ		三三一
歌舞伎座の稽古		三三七
にくまれぐち		三四一
新聞紙について		三五三

目 次

譯詩について	三五九
申 譯	三六五
中洲病院を訪ふ	三九三
市河先生の燼錄	三九九
雀	四〇三
巷 の 聲	四〇九
中村さんに質する文	四一五
正宗谷崎兩氏の批評に答ふ	四二一
後 記	四三一

荷風文稿

礫川徜徉記

何事にも倦果てたりしわが身の、猶折節にいさゝかの興を催すことあるは、町中の寺を過る折からふと思出で、其庭に入り、古墳の苔を掃つて、見ざりし世の人を憶ふ時なり。

見ざりし世の人を其墳墓に訪ふは、生ける人をその家に訪ふとは異りて、寒暄の辭を陳るにも及ばず、手土産たづさへ行くわづらひもなし。此方より訪はまく思立つ時にのみ訪ひ行き、わが心のまゝなる思に耽りて、去りたき時に立去るも強て袖引きとゞめらるゝ虞なく、幾年月打捨てゝ顧ざることあるも、輕薄不實の譏を受けむ心づかひもなし。雨の夜のさびしさに書を讀みて、書中の人を思ひ、風靜なる日其墳墓をたづねて更に其爲人を憶ふ。此心何事にも喩へがたし。寒夜ひとり茶を煮る時の情味聊之に似たりともいはいふべし。

わが東京の市内に残りし古碑斷碣、その半は癸亥の歳の災禍に烏有となりぬ。山の手の寺院にあるもの、幸にして舞馬の災を免れしといへども、移行く世の氣運は永く市塵繁華の間に金石の文字を存ぜしむべきや否や。若し是杞人の憂ひにあらずとなさんか、掃墓の興は今の世に取殘されし吾

等のわづかに之を知るのみに止りて、吾等が子孫の世に及びては、之を知らんとするも亦知るべからざるものとはなりぬべし。

掃墓の閑事業は江戸風雅の遺習なり。英米の如き實業功利の國にこの趣味存せず。たま／＼われ巴里にありて之有るを見しかど、既に二十年前のことなれば、大亂以後の巴里の人士今猶然るや否や知るべくもあらず。江戸時代に在りて普く探墓の興を世の人に知らしめし好奇の士は、江戸名家墓所一覽の一書を著せし老樗軒の主人を以てまづはその鼻祖ともなすべきにや。墓所一覽の梨棗に上せられしは文政紀元の春なること人の知るところなり。

春秋の彼岸は墓參の時節と定められたり。然れども忘れられたる古墳を尋ね弔はんには、秋の彼岸には晷^{ひあし}既に傾き易く、やうやうにして知れがたき斷碑を尋出して、さて寺の男に水運ばせ苔を洗ひ蘿を剝して漫漶^{まんくわん}せる墓誌なぞ讀みまた寫さんとすれば、衰へたる日影の蚤^{いば}くも春^{はる}きて蜩の啼きしきる聲一際耳につき、讀難き文字更に讀難きに苦しむべし。春の彼岸には風猶寒くして雨の氣遣はるゝ日も亦多きをや。花見の頃は世間さわがしければ門をいづる心地もせざるべし。八重の櫻も散りそむる春の末より牡丹未開かざる夏の初こそ、老軀杖をたよりに墓をさぐりに出づべき時節なれ。長き日を歩みつゞけて汗ばむ額も寺の庭に入れば新樹の風たゞちに之を拭ひ、木の根石の端に腰かくるも藪蚊いまだ來らず、醜草^{しきくさ}猶はびこらざれば蛇のおそれもなし。苔蒸す地の上には落花尙みだ

れてあり。日の光にかゞやく木の芽のうつくしき雨に打れし墓石の古びたるに似もやらねば、亡き人を憶ふ心落葉の頃にもまさりて又一段の深きを加ふべし。

ことし甲子の暮春、日曜日にもあらず大祭日にもあらずぬ日なり。前夜の雨に表通も砂ほこりをさまりて、吹き添ふ微風に裏町の泥濘ぬかるみも大方はかわきしかと思はれし晝過。丸の内より神田を過ぎて小石川原町なる本念寺に大田南畝の墓を弔ひぬ。われ小石川白山のあたりを過る時は、必本念寺に入りて北山南畝兩儒の墓を弔ひ、又南畝が後裔にしてわれ等が友たりし南岳の墓に香華を手向くるを常となせり。震災の時此等の墳墓いかゞなりしや。殊に南畝の墓碑はこの兆域にても形大なるものなれば、倒れ碎けはせざりしやと心にかゝりてゐたりしが、此目行きて見るに其位置少しく變りしゆみにて石は全かりき。南岳の墓は本のところに依然として立ちたり。自然石にて面に大田南岳墓。碑陰にまつくろな土瓶つゝこむ清水かなの一句を刻す。是南岳の句にして小波巖谷先生書する所、石も亦巖谷翁の贊を捐てゝ建てられしものなり。われ初て南岳と交を訂せしは明治三十二年の頃清朝の人にして俳句を善くしたりし蘇山人羅臥雲が平川天神祠畔の寓居に於てなりけり。南岳諱は亨。野口幽谷の門人なり。初陸軍士官學校に入らむとして體格検査に合格せざりしかば、素志を翻して繪事に従へるなり。其初武を以て身を立てんと欲せしは其家世々征夷府に仕へて徒士たりしによれるもの歟。南岳少くして耳聾せり。人と語るに音吐鐘の如し。平生奇行に富む。明治卅八年

秋八月日魯兩國講和條約の結ばれし時、在野の政客暴民を鼓煽し電車を燒き官廳を破壊す。輦轂の下巡邏を見ざること數日に及べり。市民各其の欲する所を恣にする事を得たりしかば、南岳白白衣をまとはず釣竿を肩にして櫻田門外に至り綸を御溝に垂れて連日鯉魚十數尾を獲て歸りしといふ。又大婚式記念郵便切手の發行せられし時都人各近郊の郵便局に赴き局員に請ひて、記念當日の消印を切手に捺せしむ。南岳輒春畫を描きたる繪葉書數葉を手にし郵便局の窓に抵りて消印を請ふ。局員裏面の繪畫に心づかず消印をなすこと三四葉にして初て驚愕の聲を發す。此時おそし南岳猿臂を伸べ繪葉書を奪つて疾走す。後に人に語つて曰く是洵に敝家の寶物なり。子孫の繁榮を祝するもの蓋し是に優るものあるを知らずと。其爲人おほむね斯の如し。曾て上野なる日本美術協會の展覽會に出品して褒狀を得たり。褒賞授與の日川端玉章手づからこれを南岳に與へしに、南岳一禮して手に取るや否や、寸斷して脚下に放棄し、悠々として其席に還りて坐す。滿堂の畫人皆色を失ふ。南岳おもむろに鄰席を顧て曰く諸君驚くこと莫れ、我狂するにあらず。唯平生川端玉章の爲人を好まず、従つて其手に觸れしもの我之を受けることを欲せざるのみと。爾來復浮名を展覽會場に爭はず。閑居自適し、時に藥草を後園に栽培して病者に與へ、又田うごき草と題する一冊子を刊刻して其効驗を説く。人戲に呼んで田うごきの翁となせり。南岳また年々土中に甕を埋めて鈴蟲を繁殖せしめ、新涼の節を待つて之を知友に頒つ。南岳を知るものゝ家秋に入つて草蟲琳琅の聲を聽かざる處なし。

知友また呼ぶに鈴蟲の翁を以てす。南岳は弓術の達人にして又水府流遊泳の師たりき。大田南畝が先人自得翁の墓誌を見るに、享保二十年七月、將軍吉宗公中川狩獵の時徒兵の游泳を閲するや自得翁水練に達したるを以て嘉賞する處となりしといふ。されば南岳の水練に巧なる蓋し來由する所ありといふべきなり。大正四五年の頃南岳四谷の舊居を去つて北總市川の里に徙り寒暑晝夜のわちなく釣魚を事とせしが大正六年七月十三日白晝江戸川の水に溺れて死せり。人其故を知るものなし。或は言ふ水中に在つて卒中症を發したるならんと。時に年四十又三なり。其配中村氏は南畝先生が外姑の後裔なり。容姿艷麗その未嫁せざるや近鄰稱するに四谷小町の名を以てしたりしと云ふ。某男某女あり。嗣子名は大。家を繼ぎしが本年の春病んで歿したりしと。われ此日始て之を寺僧に聞得て愕然たりき。因にしるす南岳が四谷の舊居は荒木町絃歌の地と接し今岡田とかよべる酒樓の立てるところなり。此日兼てより寫し置かんと思ひるたりし南畝が室富原氏の墓誌を手帳にしるす。墓誌の終に悼亡の詩六首を刻したり。蜀山集に出でたれば此に錄せず。

本念寺を出で白山権現の境内をよこぎりわづかに人力車を通すべき垣根道を北へと歩み行けば、坂の下に蓮久寺とよべる法華寺あり。是去年癸亥七月十二日わが狎友啞々子井上精一君が埋骨のところなり。門に入るに離々たる古松の下に寺の男の落葉掃きゐれば、井上氏の塋域を問ふ。導かれて行くにいまだ一周忌にも到らざれば、冢土新にして未だ碑碣を建てず。傍なる妣某氏の墓前に

香華を手向けて蓮久寺を出づ。われは今日に至りても啞々子既に黄土に歸せりとの思をなすこと能はず。この日子のわれと共に在らざるは前夜の酒を病みなぞして約に背きて來らざるが如き心地のせらるゝのみ。世に竹馬の交をよろこべるものは多かるべしといへども、子とわれとの如く終生よく無頼の行動を共にしたるものは稀なるべし。學生の頃惡少年を以て目せられしものは、儕輩の子とわれとの二人なり。十六七の頃には俱に漢詩を唱和し二十の頃より同じく筆を小説に染め又俱に俳諧に遊べり。わが狎妓の竊に子と情を通じたるものあり。子の情婦にしてわれの之を奪ひしもの亦無しとせず。蓋這般の情事は烟花場裏一夕の遊戲にして新五左衛門等の到底解し得べきところに非ざるなり。われ田舎の人より短冊を乞はるゝことあるや常に啞々子が句を書して責を塞げり。われ俳才なく自作の句を記憶せず。之を憶ふ時子の名吟まづわが念頭に浮びいづるを以てなり。舊交を追想して歩を移すほどに、いつしか白山御殿町を過ぎ、植物園に沿ひたる病人坂に出づ。坂の麓に一古寺あり。門に安閑寺の三字を掲げたり。ふと安閑寺の灸とて名高き艾を售りしは此寺なり。われ等稚いとけなき頃その名を聞きてさへ恐れて泣き止みしものと心づけば、追想おのづから縷々として絲を繰るが如し。その頃植物園門外の小徑は水田に沿ひたり。水田は氷川の森のふもとより傳通院兆域のほとりに連り一流の細水潺せんく々として其の間を貫きたり。是舊記に云ふところの小石川の流にして今はわづかに窮巷の間を通ずる溝阮となれり。嗚呼四十年のむかしわれはこの細流のほとり

に春は土筆を摘み、夏は螢を撲ちまた赤蛙を捕へんとて日の暮るゝをも忘れしを。赤蛙は皮を剥ぎ醬油をつけ焼く時は味よし。その頃金富町なるわが家の抱車夫に虎藏とて背に菊慈童の筋ぼりしたるものあり。其父はむかし町方の手先なりしとか。老いて盲目めしひとなり悴虎藏の世話になり極樂水の裏屋に住ひゐたり。虎藏わが供をなして土筆を摘み赤蛙を捕りての歸道、折節父の家に立寄り夕餉の菜にもとて獲たりしものを與へたり。貧しき家の夕闇に盲目の老夫のかしらを剃りたるが、兀然として佛壇に向ひて鉦叩き經誦める後姿、初めて見し時はわけもなく物おそろしくおぼえぬ。わが家の女中ども虎藏がおやぢはむかし多くの人を捕へ拷問なぞなしたる報にて、目も見えぬやうになりしなりと噂せしが、虎藏もやがてわが家より暇取いとまりし後いつか牛込警察署の刑事となり、わが十七八の頃一番町の家に來りて、ゆうべは江戸川端の待合にて藝者の寢込を捕へたりなぞ、其後家に來りし車夫に語りゐたりしを聞きし事ありき。極樂水の麓を環りし細流のほとりには今博文館の印刷工場聳え立ちたれば、その頃仰ぎ見し光圓寺の公孫樹も既に望むべからず。小家の間の小道を上りて久堅町より竹早町の垣根道を過ぐるに會て畫伯淺井忠が住みし家の門前より、數歩にして同心町の康衢に出づ。電車砂塵を捲いて來往せり。道の向側は切支丹坂に通ずる坂の下口にて、舊丹後舞鶴の藩主牧野家の黒板塀、玄關先の老樹と共に四十年のむかしに變る所なければ、なつかしさのあまり覺えず歩を止む。切支丹坂より茗荷谷のあたりには知れる人の家多かりき。今は有りやなし

や。電車通を傳通院の方に向ひて歩みを運べば、程なく新坂の降口あり。新樹の梢に遠く赤城の森を望む。新坂にはわが稚き頃大學總長濱尾氏の邸、音樂學校長伊澤氏の邸、尾崎弔堂が僦居、門墻を連ね庭樹の枝を交へたり。此坂車を通ぜざりしが今はいかゞにや。電車通を行くこと猶二三町にして又坂の下口を見る。是即金剛寺坂なり。文化のはじめより大田南畝の住みたりし鶯谷は金剛寺坂の中程より西へ入る低地なりとは考證家の言ふところなり。嘉永板の切繪圖には金剛寺の裏手多福院に接する處明地の下を示して鶯谷とはしるしたり。此日われ切繪圖はふところにせざりしかど、それと覺しき小徑に進入らんとして、不圖角の屋敷を見れば幼き頃より見覺えし駒井氏の家なり。坂路を隔てゝ佛蘭西人アリペーと呼びしものゝ邸址、今は岩崎家の別墅となり、短葉松植ゑつらねし土墻は城塞めきたる石塀となりぬ。岩崎家の東鄰には依然として思案外史石橋氏の居あり。遅塚麗水翁亦曾て此あたりに鄰をトせしことありと聞けり。正徳のむかし太宰春臺の傳通院前に帷を下せしは人の知る處。礫川の地古來より文人遊息の處たりと謂ふべし。扱われは駒井氏の門前より目指せし小路を西に入るに、こゝにも亦幼き頃見覺えたりし福岡氏の門あり。福岡氏は維新の功臣なり。門前の小徑は忽にして懸崖の頂に達し紐の如く分れて南北に下れり。崖下に人家あり。鶯谷は即このあたりをいふなるべし。さるにても南畝が遷喬樓の舊址はいづこならむ。文化戊辰の年三月三日、南畝はこゝに六秩の賀筵を設けたる事其隨筆一話一言に見ゆ。大窪詩佛が詩聖堂詩集卷の

十に雪後鶯谷小集得庚韻と題せるもの南畝の家のことなるべし。其作に曰く遷喬樓在懸崖上。闌
千方與赤城平。霞氣不消連旬雪。萬瓦渾如粧水晶。疑在廣寒清虛府。四望生眩總瑩瑩。主
人愛客兼愛酒。暇日開宴迎客傾。衣冠何須挂神武。與身并忘刀筆名。我是江湖釣漁客。平生
不_レ會接冠纓。十里泥濘深_レ於海。今日肯來訂酒盟。唯應爛醉報_二厚意_一。對_レ君不_レ醉作麼生。ま
た六樹園が狂文吾孀なまりに鶯谷のさくら會と題する一文ありて、勾欄の前なる櫻の咲きみだれた
るが今日の風にやゝ散りそむといへど、今はそれかとおぼしき櫻の古木もさぐるによしなし。此あ
たり今は金富町と稱ふれど、むかしは金杉水道町にして、南畝が謂はゆる金曾木なり。懸崖には喬
木猶天を摩し、樹根怒張して巖石の狀をなせり。澗道を下るに竹林の間に椿の花開くを見る。人家
の犬籬笆の間より人の來るを見て吠ゆ。宛然田家の光景なり。細徑に従つて盤回すればおのづから
金剛寺の域に出づ。寺はわづかに堂宇を遺すのみにして墓田は盡く人家となりたれば、舊記に見る
所の實朝の墓も今は尋ねべきよすがもなし。本堂の前を過ぎ庫裏と人家との間の路地に入るに、迂
回して金剛寺坂の中腹に出でたり。路地の中に稚き頃見覚えし車井戸猶在るを見たり。大都の康莊
は年々面目を新にするに反して窮巷屋後の湫路は幾星霜を経るも依然として舊觀を革めず。是を人
の生涯に觀るも亦斯くの如き歟。人一たび勢利の巷に奔馳するや、時運に激せられて舊習に晏如た
る事能はず。たま／＼鄰人の新聞紙をよみて衣服改良論を稱るものあれば忽雷同して、腰のまがつ